

25 節、「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。」

このみことばの通りでした。彼は「正しく、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた」のです。彼は熱心に約束されたメシヤを待ち望んでいた老人でした。彼は今まで聖霊の導きに全てをゆだねて生活してきました。聖霊も彼から離れませんでした。それは、次のみことばからもわかります。

25 節、「・・・また、聖霊が彼の上におられた。」

----- 3 重の聖霊の働き -----

彼は、**3 重の聖霊の働き**に預かっていました。

① 聖霊と共に生きたシメオン

・**その 1**、25 節「聖霊が彼の上におられた。」彼は聖霊と共に生きていた人でした。聖霊に常に満たされていた人でした。彼の上に聖隷の力が満ち溢れていました。

② 聖霊の声を聞いていたシメオン

・**その 2**、26 節「主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない、聖霊によって告げられていた。」受肉したイエス様を 2 つの目で見るとまでは決して死なないと聖霊のお告げを受けていました。彼は聖霊の約束を信じて今まで生きて来た人、み声を聞いて希望を待っていた人でした。救い主イエス様と出会うまでは死なないと、しかしキリストと出会ってからはすぐに天に召されることを堅く確信していました。

（豊臣秀吉の知恵袋であった黒田官兵衛の洗礼名は「耳を傾ける」でした。彼の人柄がわかります。）さて、シメオンはキリストと出会った時確信しました。29、30 節「主よ、今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。」

③ 聖霊の導きに従っていたシメオン

・**その 3**、27 節「シメオンが、御霊に導かれて宮に入ると、・・・両親が幼子イエスを連れて入ってきた。」彼は常に御霊に導かれて歩んでいました。この時もシメオンがみ霊の導きに従って歩んでいますと、イエス様と出会うことが出来ました。彼は御霊に従って生きていた人でした。

神は、聖霊に満たされていたシメオンに、彼の生前中に「メシヤを見る」と約束しておられました。ですから「御霊に導かれて宮に入ると」イエス様と出会うことが出来ました。そして、神殿で出会ったその赤ちゃんが、救い主イエス様であると彼は疑いませんでした。しるしがなくてもわかりました。（あの、羊飼いたちは飼葉桶に寝ておられるみどりごがしるしでしたが・・・）すでに、彼は聖霊によって教えられていたからです。私たちも、しるし（奇跡）を見て信ずる者でなく、聖霊に教えられて信ずる者になりたいですね。

今、私たちがイエス様と毎日親しく出会うことが出来るのも、その時恵みを感じることも出来るのも聖霊様の働きです。嬉しい気持ちで教会に行けるのも聖霊様の働きです。

----- 3重の喜び -----

そして、イエス様と出会った時、シメオンは主に3重の喜びを捧げました。

第1、神をほめたたえました

・**第1**に、28節「シメオンは幼子を腕に抱き、**神をほめたたえ**・・・」たのでした。幼子を彼の腕に抱きながら、彼は賛美しました。それが29～32節にある喜びに満ち溢れた讃歌、シメオンの讃歌です。(29～32節、読む) その賛美は、救い主と出会った喜びで満ち溢れていました。そして、このお方は異邦人までも含めた全世界の人々を確実に救うことの出来る救い主、

唯一の希望の光であることを宣言するのです。

使徒4章12節「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

今現在、世界中で約70億いると言われる人々、一つの太陽が全世界を照らすように、この幼子が世界中の70億の人々の心を照らす神、救い主となるのです。

第2、両親を祝福しました

・**第2**に、34節「シメオンは両親を祝福し・・・」ました。ヨセフとマリアが信仰に勝利したからこそ、救い主はこの世界に誕生したのです。このことは、どんなに感謝してもしきれない位です。ですから、シメオンは心から両親を祝福し、感謝したのでした。

私たちの人生も、神をたたえ、人を祝福する、人に感謝する人生でありたいですね。

第3、母マリアに辛い預言をしました

・**第3**は、34、35節「シメオンは・・・母マリアに言った。『御覧なさい。この子は、・・・人々の反対にあうしるしとして定められています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。』」

シメオンは母マリアに後のことを、これから起こる事を預言しました。それは母マリアにとっては残酷な辛い預言となりました。その内容は、次のようなものでした。

「イスラエルの人々は皆、将来メシヤがこの世に来られて、この国を救うことを信じて待ち望んでいました。そして、目の前におられる赤ちゃんのイエス様はイスラエルに救いを更に、世界中の人々に希望の光をもたらす救い主です。しかし、このお方は受難を受けられるメシヤでもあられます。そのために母親であるあなたも又、多くの苦しみを受けなければならないでしょう。「あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。」と書かれている通りです。

今、マリアは静かにシメオンの語られる言葉を聞きました。でもそれは、あまりにも内容は大きすぎて、辛すぎてマリアにとっては、とてもついて行けないような内容でした。救い主の母であるマリアが、やがて受けなければならない苦しい預言です。お腹を痛めた、我が子の苦難を見なければならない預言です。我が子の死を見なければならないという辛い預言です。

51節「・・・母はこれらのことをみな、心に留めておいた。」きっと、この後マリアは、これから我が子の上に起こる預言のことばに胸つぶされるような日々を送られることとなるのです。

----- 十字架の陰に見た悲劇 -----

画家ホルマン・ハントの描いた有名な絵に、大工の仕事場にいる少年時代のイエス様が描かれています。一日中身をかがめて、仕事をしていたイエス様が、やがて夕方となって、一日の仕事を終えて、その身をいっぱい伸ばしながら家の戸口に出て来ました。夕日は腕を伸ばして立つイエス様を明るく照らしています。そのイエス様の陰が後ろの壁に映っているのですが、それは十字架の陰となっていました。それを見た母マリアの目に恐怖がありありと浮かんでくるのでした。その十字架の陰から、やがて来るであろう我が子の十字架の悲劇を見出したのでした。

28節「シメオンは幼子を胸に抱き、神をほめたたえて言った。」

さて、シメオンは念願かなって、神様から豊かな報いをいただきました。しかしこの「・・幼子胸に抱き」の祝福は、むしろ逆にイエス様にシメオンが抱かれている祝福ではなかったかと思わされます。今、人生の最後の最後で、シメオンはイエス様の中にあって全きいこいをいただくことができました。そして、やがて天へと召されて行きました。それは、たぶん主イエス様とお会いした、すぐ後（直後）に起こったのではないかと思います。29節、「主よ、今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。」

私たちも、同じ勝利の道を歩むために、聖霊を我が内に宿し

聖霊の御声をいただき

聖霊の臨在の感ずる所に進んで行きたいですね。

年を重ねれば重ねる程、シメオンのように、良き老人になりたいと思います。

神を喜び、神に喜ばれる、そして、主に抱かれながらの日々を送りたいものです。

そして、シメオンの主への礼拝の祭壇は常に、その一生、新鮮に保たれていました。

それは、最後まで変わりませんでした。私たちの一生もその様でありたいと願います。

最後に、この1年、私たちを守ってくださったお方は、新しい年も、今まで以上に私たちを支えてくださることでしょう。こんなに素晴らしいお方を見上げつつ、これからも進んでまいりましょう。

新しい年、聖霊の3重の働きを、そして3重の喜びを体験させて
いただきましょう。